

通巻850号を迎えてー第7代編集委員エッセイ

Modern Media



これまでの編集を振り返って ～一編集委員として～

防衛医科大学校病院 感染対策室長
(前 慶應義塾大学医学部 小児科学教室)

しん じょう まさ よし
新 庄 正 宜

Masayoshi SHINJOH (SHINJO)

雑誌『モダンメディア』は、臨床検査や感染症分野の最新知見を医療現場へ伝えることを目的として、栄研化学株式会社により1955年に創刊された医学情報誌です。創刊当初は細菌学や臨床検査技術の解説を中心に伝えていたようですが、時代とともにウイルス学、感染症学、公衆衛生、分子診断、保険適用など扱う分野も広がってきました。特にこれまで日本の臨床検査や感染症診療や対策の発展と歩調を合わせ、専門家による総説、シリーズ企画、研究紹介などを通じて医療者への知識の普及を図っています。

私としても、何が話題になっているのか、どんな記事なら多くの方を引き付けるのか、一方で限定した領域であってもぜひ知ってほしい内容は何であるか、を常に考えるように心がけています。

これまでの取り組み

そうした中、自身が編集委員になって2年、主に担当した分野を振り返ってみました。皆さまもこれを機に、バックナンバーで再度ご覧になってみてはいかがでしょうか。

まず、専門外ではありますが、腸内細菌叢についてです。古代ヒポクラテスの時代にいわれていた「すべての病気は腸から」がホットトピックとなっており、書評を機にシリーズ化を目指し、採択されました。

書評「小児の腸内細菌叢 UP-TO-DATE ～基礎研究と臨床の知見～」

モダンメディア第71巻(2025年)1月号(図1左)

本稿では、金子一成先生編著による当書籍を紹介しました。本書では腸内細菌叢の解析手法、乳児期の細菌叢形成、疾患との関連などの最新知見が整理されており、小児領域における腸内細菌叢研究の基礎から臨床応用までを理解するための参考書として有用であることを紹介しました。

シリーズ腸内細菌叢ミニシリーズ

「入門から臨床まで」の開始にあたり

モダンメディア第71巻(2025年)6月号～

上記書評の執筆を機に、本シリーズを企画しました。

本シリーズ(全5回)では、西田淳史先生、濱田理風先生・永田智先生、古市宗弘先生、赤川翔平先生・金子一成先生、そして最終回は須永将梧先生・寺谷俊昭先生・金井隆典先生による解説を通じて、腸内細菌叢研究の基礎から臨床的意義までを体系的に紹介し、最新の知見を得ることができるようになっています。

書評「1からはじめる健診心電図判定 基本知識と考え方」

モダンメディア第71巻(2025年)10月号(図1右)

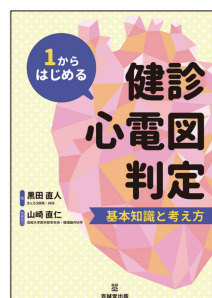
次に、上記と全く別分野ですが、小児科医として、若いころは心電図を読む機会も多かったため、書評として以下の書籍を執筆しました。

黒田直人先生著(山崎直仁先生執筆協力)の当書籍を取り上げ、同じく編集委員の堤武也先生とともに書評を執筆しました。本書は心電図の基本的な読み方から健診でよく遭遇する異常所見の判



『小児の腸内細菌叢 UP-TO-DATE ～基礎研究と臨床の知見～』

編著
関西医科大学 小児科学講座 教授
金子 一成



1からはじめる 検診心電図判定

著
さんろう病院・内科
黒田 直人

執筆協力
高知大学医学部老年病・循環器内科学
山崎 直仁

発行：克誠堂出版株式会社
〒113-0033 東京都文京区本郷 3-23-5-202
定価：4,000 円＋税

図 1 著者が書評を書かせていただいた書籍 2 冊

断までを段階的に解説しており、図表と色彩を多用した構成で理解しやすく、健診業務に携わる医療者にとって実践的な入門書であることを紹介しました。病理専門医のご経歴をもつ先生がお書きになっているところも特徴です。

新版 全国衛生研究所見聞記 其ノ貳拾弍 京都府保健環境研究所之巻

モダンメディア第 71 巻 (2025 年) 12 月号

最後は見聞記です。見聞記と座談会は、当雑誌の大きな目玉です（と思っています）。

地方衛生研究所は、感染症サーベイランスや病原体検査、公衆衛生研究などを担う重要な拠点です。本稿ではシリーズ「全国衛生研究所見聞記」の一環として、2025 年の夏に京都府保健環境研究所を訪問し、宇野理化学課長、田邊細菌・ウイルス課長、近藤技術次長をはじめ現場の方々、そして藤田直久所長への取材をもとに、業務内容や研究体制について紹介しました（図 2、役職は当時）。



左から、宇野理化学課長、田邊細菌・ウイルス課長、藤田直久所長、探訪子、近藤技術次長

図 2（京都府保健環境研究所を訪問時）

コロナ期の大変な業務のお話、最新の機器を駆使して多岐にわたる業務を一手に担っていらっしゃるお姿、課内・所内にとどまらず京都市とも連携しながら業務を遂行している点に深い感銘を受けました。現場の研究者の方々と所長との和やかな会話も印象的でした。

今後の展望

この後はどのような企画がいいか。検査関係でいいますと、いずれ、「検査結果に届出疾患であることを明示する取り組み」を話題にしてみたいと思います。これは、私が理事の 1 人となっている一般社団法人日本小児感染症学会、そして一般社団法人日本感染症学会・一般社団法人日本臨床微生物学会の 3 学会と一般社団法人日本衛生検査所協会（日衛協）で締結をしました。簡単に言いますと「麻疹-IgM 陽性」「FTA-ABs-IgM 陽性」等の結果とともに、「届出対象疾患です」という文言が入っていれば、医師が届出疾患であることに気づきやすいのでは…を実践するワーキンググループです。

その他、食品衛生の話題が少なくなっているというご意見もいただいていますので、感染症に関わる食品の話題も提供したいとも考えています。

感染症領域では、既存の疾患であっても流行などを契機に急に注目を集めることが多く、新しい検査や治療の話題も相まって、なかなか追いついていけません。それでも、一編集委員として、読者の皆さまが面白い・興味深いという題材を探して、進めていきたいと思っています。